**宗岡家住宅**

宗岡家は石見銀山の鉱山の歴史を通して多くの重要な役割を担った武家でした。一族の最も知られている人物は宗岡弥右衛門で、石見に生まれ育ち、鉱山の専門家であった人でした。弥右衛門は、毛利家が徳川家によって石見銀山の支配権を失うまで毛利輝元（1553～1625年）につかえました。1603年に徳川家が日本を統一して幕府を開き、1867年まで国を支配しました。徳川家に初めて指名を受けた銀山奉行の大久保長安（1545～1613年）が弥右衛門を当用し、弥右衛門は国のいくつもの豊かな貴金属資源に関連する役職を任じられました。このうちのいくつかは、佐渡（現在の新潟県沖）の金銀山で、弥右衛門はその頃までには宗岡佐渡という称号で知られるようになっていましたが、1613年に死没しました。

弥右衛門の子孫は石見銀山で働き続け、主に税金の取り立てと奉行所の行政に関わっていましたが、1790年になんらかの意見の食い違いで一族はその職を失ってしまいました。宗岡家は1823年に石見銀山に戻り、当時の家長が同心――現在の警部くらいに当たる下級役人――として雇われました。その後まもなく、一家は遠縁の親戚、阿部家によって住居を与えられました。1830年代に建てられたこの住宅が現在の宗岡家住宅で、この武家屋敷は正面に庭があり、蔵とかつて茶屋として使われていた離れもあります。塀と門は失われてしまいましたが、裏手の納屋はオリジナルの設計図に基づいて再建されました。宗岡家住宅は一般開放されていませんが、宿泊のためにレンタルすることが可能です。